「なっちゃんは、ほっとけない」第1話

水瀬真理佳

〈登場人物〉

本田夏海（16）本田家の長女、高校2年生
本田冬馬（13）本田家の長男、中学2年生
本田春樹（8）本田家の次男、小学2年生
本田秋悟（40）亡き夏海たちの父親
本田七海（38）亡き夏海たちの母親
西山凛（16）夏海のクラスメイト
藤井拓海（16）夏海のクラスメイト
橘龍太郎（16）夏海のクラスメイト
佐野聖也（16）夏海のクラスメイト
中村康太（36）夏海の担任
小勝由利（30）養護教諭
澤村千恵（60）弁当屋の店主
小林（16）夏海のクラスメイト
佐藤（16）夏海のクラスメイト
三上（17）他クラスの生徒
渡辺（43）コンビニの店長
男性客
警察官1
警察官2

○マンション・全体（朝）

中層マンションの外壁に朝日が当たっている。

○同・本田家・キッチン（朝）

長女・本田夏海（16）、制服にエプロン姿で野菜を切る。

コンロで煮たっている鍋の蓋を開けると、中にはつゆに浸った牛肉と玉ねぎ。

スプーンで汁をすくって味見。

夏海「うん。いい感じ」

壁掛けの時計は7：00ちょうど。

○同・本田家・廊下（朝）

夏海、廊下の両脇にある部屋をそれぞれノックしてドアを開ける。

夏海「冬馬ー春樹ー！　7時だよ！」

○同・本田家・冬馬の部屋（朝）

長男・本田冬馬（13）、スッと起き

上がるが目は開いていない。
大きくあくびをしながらベッドを出る。

○同・本田家・春樹の部屋（朝）

次男・本田春樹（８）、ピクリともしない。

春樹「まだまだやれるし……」
と、寝言を言う。寝相が悪い。

○同・本田家・リビング（朝）

制服を着た冬馬と眠そうな春樹が並んで椅子に座る。
それぞれの前にはトーストやサラダがワンプレートになって置かれている。

冬馬「いただきます」
と、手を合わせる。
春樹、ウトウトしながらトーストをかじる。
冬馬、春樹の様子をチラッと見て、

冬馬「春樹、寝癖ついてるぞ」

春樹「（眠そうに）わざとだしい」

夏海はテーブルの上で市販の弁当の中身を空の弁当箱に移す。

冬馬「夏海、朝ごはんは？」

夏海「作りながらつまんじゃった」

弁当箱を閉め、今度は洗い物を始める。

冬馬「俺やるからいいって」

夏海「ありがとー！　でも大丈夫大丈夫」

春樹「ねぇちゃん新しいせいふくだ！」

夏海「そう！　今日から新しい学校だからね」

春樹「へぇ〜！」

冬馬、申し訳なさそうに夏海を見る。

夏海「食べたらお皿ちょうだいね」

○同・本田家・和室（朝）

仏壇の前に正座する夏海と冬馬。

父・本田秋悟（４０）と母・本田七海（３８）の写真が並ぶ。

春樹は座らず、

春樹「お父さんお母さん行ってきまーーす」

と、走って部屋を出る。

冬馬「おい春樹！」

夏海「車に気をつけてよー！」

夏海が仏壇のリンを鳴らして手を合わせる。冬馬も手を合わせる。

夏海「（目を瞑って）お父さん、お母さん。兄弟3人、今日も元気に行ってきます」

夏海、立ち上がった時に靴下の穴に気づく。右足の親指が見えている。

夏海「あ……」

夏海、両足の靴下を脱いで丁寧に畳む。

○同・本田家・玄関（朝）

冬馬が家を出るのを見送る夏海。

冬馬「なぁ。やっぱり西高戻んなよ」

夏海「もうその話は終わり。西高はね、2年からは朝も早く行って勉強だし、放課後も授業があるんだよ？　私大学行かないし、意味ないもん。そんな勉強したくない」

冬馬「夏海は勉強好きだし、できるじゃん！

大学も絶対行くべきだと思う。母さんたちだって絶対そう言うに決まってる！」

夏海「それに私、西高よりこっちの制服の方が好きなんだよね。似合ってるでしょ？」

と、くるくる回ってスカートをなびかせる。

冬馬「入谷高って、底辺の人間が行くヤンキー高校だよ。共学なのに女子はいない。なんでか分かる？　それくらいガラ悪いんだよ」

夏海「そんな言い方しないの！　ヤンキーは ね、私みたいな地味で面白くない人間には興味ないから」

冬馬「ヤンキーのこと何も知らないくせによく言うよ」

夏海「（ドヤ顔で）今春樹と見てるドラマにヤンキーが出てくるの」

冬馬、大きなため息をつく。

冬馬「……マジで心配なんだけど」

夏海「大丈夫。教室の隅で大人しく過ごすか

ら。ね？」

冬馬「スマホ貸して、今の録音するから」

と、手を出す。

夏海「そこまでする！？　私ってそんなに信用ない！？」

冬馬「（当たり前のように）世話好きな夏海が、黙ってじっとしてられるわけないし」

夏海「（口を尖らせて）そんなことないもん……あ、そうだ。冬馬今日部活だよね。冬馬の好きな牛丼作っておいたから。帰ったらあっためて先に春樹と食べててね」

冬馬「……うん。ありがと」

夏海「ほら、遅れるよ」

冬馬「……行ってきます」

夏海「行ってらっしゃい」

ドアが閉まって、

夏海「私も準備しないと」

◯商店街・通り（朝）

それぞれの店先で準備をしている店主

たちが「おはようなっちゃん」「行ってらっしゃい」と夏海に声をかける。

夏海「おはようございます！　行ってきます！」

と、手を振りながら自転車で通過。

○入谷高校・全体（朝）

建物のシミが目立つ古い校舎。

ただならぬ空気が流れている。

○同・駐輪場（朝）

錆びついた自転車が2、3台重なり合って倒れ、隣に派手なバイクが止まっている。

夏海、自転車を止め、倒れている自転車を1台ずつ起こす。

中村「本田さーん！」

と、担任・中村康太（36）が走ってくる。

夏海「中村先生！　おはようございます！」

中村「おはよ。そんなのほっといていいから」

夏海、倒れていた最後の自転車を起こして、

夏海「今日からよろしくお願いします！」

中村「……本当にいいのか？」

夏海「はい！」

中村「気持ちは変わらなかった？」

夏海「変わってません！」

中村「分かった……ようこそ、不良のジャングルへ」

夏海、ワクワクした表情で校舎を見上げる。

○同・2年A組（朝）

教室内の壁や黒板の至る所に落書き。

机は10ほどしかなく、全体的に後方に寄せられてぐちゃぐちゃに並ぶ。

空のペットボトルや菓子のゴミ、誰のものか分からないTシャツ、コミック誌や青年誌などが散乱。

派手な髪色で制服を着崩した生徒たちが会話したりゲームをしたり各々自由に過ごし、騒がしい。

中村「ちゅーもーく」

中村が教卓で話し始めても見向きもしない。中村、気にせず続ける。

中村「今日は転校生紹介するから」

夏海、凛とした佇まいで中村の横に並ぶ。

騒がしかった教室が一瞬で静まり、クラス全員が夏海の方を見る。

銀髪の西山凛（16）、いちごミルク味の棒付きキャンディを咥えたまま一瞬夏海を見るが、すぐにやっていたジグソーパズルの続きに戻る。

中村「じゃあ簡単に自己紹介を」

夏海「初めまして。今日からこのクラスでお世話になります、本田夏海です。よろしくお願いします！」

中村「というわけだ。お前らくれぐれも手出

すんじゃねーぞ」

小林「前の学校で何やらかしたんですかぁ」

佐藤「なんカップ〜？」

クラスメイトの小林（16）と佐藤（16）が好き勝手に質問する。

中村「本田さん、シカトしていいから」

しかし夏海は気にせず答え始める。

夏海「前の学校で問題を起こして転校したわけではないので安心してください。それから私はマグカップです！」

一瞬教室が静まり、すぐに笑いが起きる。

佐藤「マグカップってなんだよ」

小林「大きいのか小さいのかわかんねぇ」

しかし夏海はなぜ笑われているのか分からずとりあえずニコニコしている。

教室の後方では、

聖也「やべぇ。オモロいやつ来た」

と、オレンジ髪の佐野聖也（16）がケラケラ笑う。

龍太郎「天然すぎだろ」

と、唇にピアスをした橘龍太郎（16）が感心する。

文庫本を読んでいた藤井拓海（16）は失笑して読書に戻る。

凛は難しい顔をしてジグソーパズルのピースを探している。

中村、頭を抱える。

○同・2年A組（休み時間）

後方の席で、

龍太郎「俺ちょっと話しかけてこよーっと」

聖也「オレも～」

と、立ち上がる。

拓海「怖がらせんなよ」

と、2人を見送る。

凛はジグソーパズルに夢中。

龍太郎と聖也、教卓の前の席に姿勢よく座る夏海を囲む。

龍太郎「なぁ、西高行ってたんだろ？　なん

でうちなんか来たんだよ優等生ちゃん」

聖也「いじめられたとか？」

夏海「西高だとバイトの時間が限られてしまうので転校しました」

龍太郎「えら～！　金稼いで何に使うん？」

聖也「アイドルだろ！　それかホスト！」

夏海「うちは食べ盛りの男の子が2人もいるので、何かと物入りで」

龍太郎「ブフッ。物入りって」

聖也「子どもいんの！？　意外とやることやってんなー。何歳！？」

思わず本音が漏れた聖也の頭を龍太郎が軽く叩く。

夏海「あ、いえそうではなくて」

夏海が説明しようとすると、廊下が騒がしくなる。

他クラス、他学年の生徒たちが教室の中を覗き込んでいる。

龍太郎「すっかり人気者だな優等生」

夏海「私ですか！？」

聖也「そりゃあ、この学校ゆいつの女子だし。
確か100年ぶりくらい？」
夏海「この学校って去年創立50周年じゃ…
…？」
聖也「そうなん？　すげーな、そんなことも
知ってんの！」
夏海、苦笑。
龍太郎、廊下を見ながら、
龍太郎「これじゃあ中村も入ってこれねーな」

○同・廊下（休み時間）
2年A組前の廊下いっぱいに人だかり
ができている。
中村「テメーラ何してんだよ。ほらどけ。入
れねーだろ」
と、カラフルな頭たちを出席簿で叩く。

○同・2年A組（休み時間）
夏海「私、道を開けてもらうように頼んでき
ます！」

と、勢いよく立ち上がる。

聖也、両手を広げて夏海の前に立ちはだかる。

聖也「いーじゃん別に。授業なんて誰も聞かねーし」

夏海「私は聞きたいです！」

その時、後方で机が吹っ飛ぶ音がする。

夏海、ビクッとして後ろを振り向く。

凛が机を廊下に蹴り飛ばしたおかげで廊下に空間ができる。

三上「お前が西山だな」

と、扉のそばに他クラスの三上（17）が立ちはだかる。

凛、咥えていた棒付きキャンディを口から出して、

凛「……誰だテメェ」

三上「フッ。俺はな、3年の鎌田さん率いる黒龍会で、」

凛、三上の話の途中で、

凛「……どけよ」

しかし、三上も引き下がらない。

三上「鎌田さんが直々にオマエをご指名だ。ありがたく思うんだな」

凛、再び三上の話の途中で、

凛「……どけっつったろ」

と、三上の腹を膝で蹴り上げる。

三上、腹を押さえて廊下に座り込む。

凛、キャンディを咥えながら教室を出て、空間ができた廊下を歩いていく。

中村「西山ぁー！　机戻してけぇー！」

という怒号が廊下中に響く。

教室内では「西山スゲェ」という声が上がる。

龍太郎「黒龍会に凛のこと勧誘しにきたんか」

聖也「ムダムダ。凛は自分が認めたヤツしかキョーミねーもん。鎌田のことなんて多分名前も知らねーよ」

夏海、目をパチパチさせて、

夏海「今の方は……？」

龍太郎「アイツは西山凛。この辺の不良の中

じゃかなりの有名人」

聖也「入谷の白（しろ）トラって呼ばれてんだぜ」

龍太郎「白（しろ）トラじゃなくて、白虎（ビャッコ）な」

夏海「白虎……」

聖也「それそれ。この学校で凛に勝てるヤツはまずいないな。まさに絶対王者！」

夏海「（真剣に）なるほど……つまり西山くんは生徒会長みたいな存在なんですね」

聖也、教卓を叩きながら爆笑する。

聖也「アハハハっ生徒会長って。あ～腹痛ェ」

龍太郎「（楽しそうに）まぁ優等生語だとそうなるかもな」

聖也「凛が本気でキレたらマジヤバいから。怒らせないようにな、優等生」

その時、拓海が2人を呼びに来る。

拓海「龍、聖也。行くぞ」

龍太郎「ん。（夏海に）じゃあな」

聖也「じゅぎょー頑張れよ」

と、凛を追って教室を出ていく3人。

夏海「行っちゃった……」

中村「すまんすまん。授業始めるぞー」

と、入ってくる。

夏海「お願いします！」

と、嬉しそうに教科書とノートを開く。

夏海の後ろでは、話したりスマホを見たり眠っている生徒たち。

授業もお構いなしに、教室を自由に出入りする者もいる。

○同・2年A組

校舎内にチャイムが鳴り響く。

中村「じゃあ今日はここまで」

夏海「ありがとうございました」

中村「本田さん、昼持って来てる？」

夏海「はい」

中村「じゃあ食べるとこ案内するわ」

夏海「ここじゃないんですか……？」

中村「こんなとこに置いとけねぇから！」

夏海、首を傾げる。

○同・保健室

中村、扉をノックする。

由利の声「どうぞ〜」

白衣の下にミニスカートを履いた養護教諭・小勝由利（30）が迎える。

夏海「こんにちは……」

由利「あなたが転校生ちゃんね」

夏海「2年A組の本田夏海と申します！」

由利、じっと夏海を見つめて、

由利「やだ、超可愛い〜なっちゃんって呼んでいい？」

と、夏海を思いっきり抱きしめる。

夏海の顔が由利の胸に埋もれて真っ赤になる。

中村、夏海から由利を引き剥がす。

中村「教室よりは安全……だよな？」

と、釘を刺すように由利を睨む。

由利「あったりまえでしょ！　あんな猛獣だ

らけの所と一緒にしないで。なっちゃんこ
こ座って。一緒にお昼にしよ」
由利、中村をしっしっと追い払う。
夏海「お邪魔します……」
由利「私は小勝由利。みんなからは由利ちゃ
んって呼ばれてる」
夏海「（嬉しそうに）由利ちゃん先生」
由利「早速囲まれたんじゃない？　大丈夫？
この学校、不良のジャングルだから」
夏海「確かにちょっと見た目が怖い人は多い
ですけど、みなさん優しいんです。朝もク
ラスの方が話しかけてくれて」
由利、目を潤ませて夏海を見る。
由利「なっちゃんって見た目通り、ほんとに
心が澄んだいい子なんだね」
夏海「（笑いながら）そうですか？」
由利「訳ありの環境で育ってきた奴も多いか
らさ。強くないと食われると思って、虚勢
張ってるとこもあんだよね。根は悪い奴ら
じゃないし、意外と可愛いとこもあんのよ」

夏海、頷きながら話を聞く。

由利「困ったことあったらいつでも相談にきな。もちろん、ただ遊びにくるのも大歓迎」

と、ウインク。

夏海「（笑顔で）はい！」

○同・2年A組

壁掛けの時計は15：10。

夏海、教室の後ろにある掃除用具入れからほうきを取り出し、1人で教室の掃除を始める。

夏海「あの！」

と、コミック誌を読んでいる佐藤に声をかける。佐藤の席の下や周りはゴミで溢れている。

佐藤「あん？」

夏海「すみません。ここを掃きたいので、少し移動してもらってもいいですか？」

佐藤「ムリぃ」

夏海「では、ここはお願いします」

と、ほうきを渡す。

佐藤「随分チョーシ乗ってんなぁ転校生」

と、立ち上がる。

夏海「あ、じゃあそのままこっちにお願いします。机の下掃いちゃいますね」

と、佐藤の座席の下をほうきで掃こうとする。

佐藤「ここはオレの席なんだよ。勝手なことすんな！」

と、怒鳴る。

夏海「教室はみんなの場所です！」

佐藤「んだとこのヤロー！」

夏海と佐藤が睨み合う。

凛「……ピーピーうっせぇーな」

と、凛が教室に入ってくる。

その後ろには拓海、聖也、龍太郎。

佐藤「……コイツがふざけたこと言うんだよ！」

夏海「ふざけてなんかいません！」

佐藤「テメェいい加減にしろよ！」

しかし夏海は怯まない。

凛、夏海の前にやって来て手を出す。

凛「……いくら？」

夏海「え？」

凛「言う通りにしたらいくらくれんの？」

夏海「お金は払えません」

凛「人にもの頼むなら、その対価は払ってもらわねーと。世の中ギブアンドテイク。金が無理なら別の方法でもいいけど」

と、夏海の胸元のリボンに手をかけて顔を近づける。

夏海、咄嗟にギュッと目を瞑る。

凛、フッと笑って、

凛「なに。キス、されると思った？」

と、夏海の耳元で囁く。

夏海「っ……！」

と、顔を真っ赤にして耳を押さえる。

夏海「思ってません！　そもそも、自分たちが使っている場所を掃除することに対価を求めるのはおかしいと思います」

拓海「（小さく）言うねぇ」

と、口角を上げる。

龍太郎と聖也は声を殺して爆笑。

他のクラスメイトはヒヤヒヤしながら見守る。

凛「それはオマエのエゴだろ。俺らに押し付けんなよ。ここじゃあ、いい子ちゃんアピールしたって点数稼ぎになんねーぞ」

夏海「別にそんなつもりじゃ……！」

中村「あれ、本田さんまだ残ってたの？」

と、顔を覗かせる。

夏海「すみません、教室の掃除が終わってなくて……」

中村「掃除なんていいよ。週に1回は掃除のおばちゃんくるから。それより早く帰りなよ。バイトあるだろ？」

夏海、時計を二度見する。

夏海「すみません、失礼します！」

と、ほうきをしまい、小走りで教室を出て行く。

凛、夏海が出て行った扉を見つめる。

○さわむらキッチン・店の前（夜）

通りの一角の弁当屋。

軒先には【さわむらキッチン】と。

立て看板にはおすすめメニューの写真が貼ってある。

○同・店内（夜）

夏海、店のロゴが入った黒いキャップをかぶり、エプロンを着てレジで接客。

ビニール袋に入れた弁当を客に渡して、

夏海「ありがとうございました！」

後ろの厨房から店主・澤村千恵（60）が顔を出す。

千恵「なっちゃんお疲れ。もう看板とってきてくれる？」

夏海「はい！」

×　×　×

夏海、看板の写真を剥がし、日付を書

き換える。

千恵「今日コンビニの方は休み？」

夏海「今日は休みにしました。でも明日からバリバリ働きます！」

千恵「あんまり無理しちゃダメよ。ほら、残ってる弁当持って帰っていいからね！」

夏海「ありがとうございます！」

○マンション・本田家・リビング（夜）

夏海「ただいまー」

冬馬と春樹「おかえりー」

キッチンでは冬馬と春樹が洗い物をしている。

夏海「ありがとう2人とも」

と、後ろからハグ。

春樹「ねぇーちゃんやめろってー」

と、体をよじる。

すると、洗濯が終わった音がする。

夏海「もしかして洗濯も回してくれたの？」

冬馬「俺が干すから。夏海は風呂入ってきな」

夏海「いいのいいの。ありがとね」

冬馬、小さくため息をつく。

×　×　×

夏海、物干しスタンドに洗濯物を干していく。冬馬もそれを手伝う。

春樹は宿題をしながら、

春樹「ねぇちゃん。オレくつちっさくなった！　新しいのほしい！　CMでやってるあのカッコいいやつ！」

冬馬「（睨みながら）なんでこの間の誕生日の時言わなかったんだよ」

春樹「だってたん生日はゲームほしかったし」

夏海「まぁまぁ冬馬落ち着いて。靴は日用品だから、プレゼントとは別枠だよ」

春樹、冬馬にあっかんべぇとする。

冬馬、イラっとした表情。

夏海「商店街の靴屋さんにあるかな？」

春樹「あそこにはぜったいない！」

夏海「じゃあ久しぶりにみんなでショッピングモール行こっか」

春樹「イェーイ！」

冬馬、呆れた顔で春樹を見る。

○同・本田家・リビング（深夜）

夏海、靴下の穴を直している。

冬馬「夏海」

夏海「冬馬。まだ起きてたの？」

冬馬、茶封筒をテーブルに置く。

中には1万円札が入っている。

冬馬「ごめん、少しだけど。これで夏海の必要な物とか欲しい物買って」

夏海「ありがとう。気持ちだけもらっとくね」

と、封筒を冬馬の方に戻す。

しかし冬馬も夏海の方へ戻して、

冬馬「夏海は自分のこと後回しにしすぎ！まだ高校生なんだから、部活したり友達と遊んだり、もっと自分を優先しろよ！　家事だってもっと俺やれるから！　バイトもしなくたって、母さんたちの金もあるだろ。足りない分は中学卒業したら俺が働いて稼

ぐから！」

夏海「ありがとう、冬馬。でもやっぱりこれはもらえない」

と、冬馬の手に封筒を持たせる。

冬馬「（不満そうに）どうせそう言うと思った」

と、大人しく受け取る。

冬馬「学校はどう？　うまくやれてんの？」

夏海「それが聞いてよ。教室がすっごい汚いから掃除しようとしたら断固拒否されてね。じゃあ自分でやってって言ったら、それも嫌だって言うんだよ？　やってほしいならお金払えとか言う人もいて。もう信じらんない。ひどいでしょ？」

冬馬「（鬼の形相で）信じらんないのは夏海だから！　教室の隅で大人しくしてるって言ったじゃん！　何してんのマジで！」

と、説教が始まる。

夏海、説教を受けながら頬が緩む。

冬馬「なぁ、ちゃんと聞いてる？」

と、睨む。

夏海「聞いてるよ。冬馬がしっかりしてるから、ほんと助かるなーって」

冬馬「うん。何も聞いてないってことが今分かった」

と、手で顔を覆う。

○住宅街・道（早朝）

夏海、自転車を走らせる。

辺りはまだ薄暗い。

○さわむらキッチン・店の前（早朝）

夏海、看板を出してメニューの写真を貼り付ける。

○同・店内（朝）

サラリーマンやＯＬ、学生がレジに並ぶ。

夏海、ひたすら接客を続ける。

夏海「ありがとうございます。行ってらっしゃい！」

と、にっこり笑って見送る。

千恵「なっちゃん8時だよ」

夏海、エプロンを脱ぎながら、

夏海「千恵さん行って来ます！　また夕方に！」

千恵「行ってらっしゃい！　気をつけてね」

○坂道（朝）

夏海、全速力で立ち漕ぎして坂を上る。

○入谷高校・2年A組（授業中）

真面目に板書する夏海。

後方の生徒たちは喋ったり好き勝手している。

聖也は鼻いびきをかいて寝ている。

龍太郎は聖也の頬に落書きをして楽しむ。

拓海、龍太郎の落書きを見てクスクス笑い、読書に戻る。

凛は棒付きキャンディを咥えながらジ

グソーパズルに夢中。
水着姿のセクシーなグラビアアイドルの写真が出来始めている。

○坂道（夕方）
坂道を自転車で颯爽と下りる夏海。

○さわむらキッチン・店内（夕方）
買い物中の主婦や学生がレジに並ぶ。
夏海、ひたすら接客を続ける。
夏海「ありがとうございます。お気をつけて！」
と、にっこり笑って見送る。

○レジャー施設・ボウリング場（夕方）
凛がボールを持ってレーンに立つ。
狙いを定めてボールを投げる。
ボールが転がる間、
聖也「はずれろはずれろはずれろぉー！」
と、懇願する。

拓海はじっと見守る。

ボールが当たり、ピンが全て倒れる。

凛「（ガッツポーズして）っしゃ」

聖也「あぁ〜〜」

と、崩れる。

拓海「まだまだこっからだろ」

と、聖也の背中を叩く。

龍太郎「うぇーい。ナイス凛」

龍太郎、凛とハイタッチする。

○さわむらキッチン・店の前（夜）

夏海「お疲れ様でした！」

と、扉から出てくる。

自転車で走り出す。

○レジャー施設・外（夜）

聖也「じゃーなー！」

凛「おー」

凛は拓海、龍太郎、聖也たちとは反対方向へ進む。

○コンビニ・店内（夜）

若い男性客がレジにくる。

男性客「……21番」

夏海「21番ですね。身分証をお願いします」

男性客「……そんなの見せたことねぇよ」

夏海「すみません。ご協力をお願いします」

男性客「チッ。今は持ってねぇ」

夏海「では取りに帰られますか？」

男性客「ふざけんな！　確認しなくたってどう見ても成人だろうが！」

夏海「（毅然と）ご協力いただけない場合は警察を呼ぶことになりますが……」

男性客「お客様が買うっつってんだから柔軟に対応しろよ！　ったく使えねぇ店員だな！」

夏海、レジ周りを見て、

夏海「えっと……代わりにこちらはいかがでしょうか」

と、レジ横にあるいちごミルク味の棒付きキャンディを差し出す。

男性客「あ？」

夏海「最近入荷した新フレーバーなんです」

男性客「なぁ、ふざけてんの？」

と、レジ台を強く叩く。

ビクッとする夏海。

男性客「誰が飴なんて食うか！　いらねぇよ！」

と、夏海の手からキャンディを奪い取り、後ろに向かって放り投げる。

それをキャッチする音。

凛「……っぶねぇな」

男性客「あぁん？」

と、振り向く。

凛「……タバコ買えねぇお子様はさっさと帰ってねんねしろよ」

男性客「んだとクソガキ！」

と、凛に詰め寄り胸ぐらを掴む。

凛、即座に男性客の腕を後ろに捻り上げ、床にうつ伏せにして制圧。

その上にドカッと座って、

凛「（本気の声で）さっさと失せろ。（男性の耳元で）それとも、一生ねんねさせてやろうか？」

男性客「……（凛と夏海を睨んで）覚えてろよ」

と、凛の下から抜け出し、走って店を出て行く。

夏海「ありがとうございました、西山くん」

名前を覚えられていたことに驚く凛。

夏海「同じクラスの本田夏海です。初日にちょっと話したんですけど、覚えてますか？」

凛「……忘れた」

夏海「改めて、よろしくお願いします。西山くんのお家はこの近くなんですか？」

凛「……たまたま通っただけ」

夏海「そうだったんですね。あ、キャンディもありがとうございます」

と、手を出す。

凛、キャッチしたキャンディを夏海に渡す。

凛「……悪かった」

夏海「え？」

凛「……余計なことしてアイツの恨み買ったかも」

と、店を出て行く。

夏海、目を丸くして西山の背中を見つめる。

すると店長・渡辺（43）が来て、

渡辺「ごめんごめん。今の銀髪の人、なんか言ってきた？　大丈夫？」

夏海「違うんです。彼は助けてくれたんです」

渡辺「（ギョッとして）えぇ？」

夏海M「それから、なぜか西山くんはよくうちのコンビニに来るようになった」

◯コンビニ・店内（夜・日替わり）

夏海、商品棚の確認をしている。

自動ドアが開き、音が鳴る。

夏海「いらっしゃいませ」

入って来たのは凛。

雑誌コーナーへ直行して青年誌をめくる。時計は21：41を指している。

×　×　×

凛、何かを探すように菓子の棚を1周。そしていちご味の棒付きキャンディを1つ持ってレジに向かう。

夏海「いらっしゃいませ。お預かりします」

と、凛から商品を受け取り、スキャン。

夏海「180円になります」

凛、スマホでバーコードを表示する。

夏海、リーダーでバーコードを読み取りながら、

夏海「このキャンディ、色んな味があるんですね。西山くんのオススメは何味ですか？」

凛「……」

夏海、キャンディにテープを貼って、

夏海「良かったら今度教えてくださいね。ありがとうございました」

と、キャンディを渡す。

凛、去り際に、

凛「……いちごミルク」

と、言い残して店を出る。

夏海「ちょっと意外かも」

と、口角を上げる。

渡辺「本田さん、22時なったからもう上がっていいからね」

夏海「はい！　お先に失礼します」

○住宅街・道（夜）

人通りのない道を自転車で走る夏海。

同じく自転車で距離をとって後ろを走る凛。

○マンション・前（夜）

自転車を降りて建物の中に入る夏海。

何も気づいていない。

凛、夏海が部屋の中に入るのを確認して引き返す。

○入谷高校・2年A組（授業中）

窓の外では雨が降っている。
夏海、ノートを書きながらチラッと後ろを見るが、凛、拓海、聖也、龍太郎はいない。

○西山家・外観
雨がしとしと降っている。
立派な門の一軒家。表札には【西山】と。

○同・凛の部屋
我が家のようにくつろぐ拓海、聖也、龍太郎、そして凛。
漫画を読んだりトランプをしたり、思い思いに過ごす。
聖也「優等生、上手くやれてっかな〜？」
拓海「本田さんだっけ？」
聖也「おん」
龍太郎「（ニヤニヤしながら）さては聖也。お前ホレたな？」

聖也「ちげーし。オレギャルしかキョーミねーもん」

龍太郎「優等生みたいな可愛い清楚系はタイプじゃないか」

聖也「でも、なーんかほっとけねーんだよ。この間も佐藤とバトってたし。子どものはじめてのおつかい見てる気持ちになる」

凛「……分かるわ」

と、呟く。

拓海と聖也と龍太郎「……え？」

凛「（我に返って）あ？」

龍太郎『あ？』じゃなくて。凛いま絶対テキトーに相槌うったろ」

と、笑う。

凛「……あぁ」

聖也「おつかいで思い出したけどさ。優等生子どもいるらしいよ」

拓海「マジで？」

聖也「龍も一緒に聞いてたよな！　食べ盛りの子が2人いるって！」

拓海「俺らと同い年で食べ盛りの子どもが2人いるって、普通に考えてありえないだろ」
龍太郎「でも確かに食べ盛りとは言ってたんだよ」

凛、興味ないフリをしながら3人の会話に耳を傾ける。

◯同・凛の部屋（夜）

テレビゲームをしている凛、拓海、聖也、龍太郎。

龍太郎「くっそぉーーまた負けた。拓海家でコソ練してるだろ」
拓海「してねぇーわ」
聖也「もっかい！　もっかいやろ！」
凛「悪いけど俺出かけるから」
龍太郎「もしかして女？」
凛「（雑に）まーな」
聖也「くそぉいいなーー。凛、今度合コン開いてくれよ！」
凛「やだよめんどくせェ。自分で見つけろ」

○同・門の前（夜）

凛「じゃあな」

と、傘を差して拓海たちとは反対に歩いて行く。

拓海「そういえば、女って誰のことだ？」

龍太郎「最近できたんじゃねーの？」

聖也「モテ男はいいな～」

拓海、不思議そうな顔で凛の後ろ姿を見つめる。

○コンビニ・店内（夜）

凛が店内に入ってくる。

夏海「いらっしゃいませ」

と、レジから声をかける。

凛、雑誌コーナーへ直行して青年誌を読む。パズルと同じグラビアアイドルのページ。

×

×

×

凛、スマホで時間を確認、21：58。

何かを探すように菓子の棚を1周して、

いちご味の棒付きキャンディを1つ持ってレジに向かうが、夏海はいない。

店内を見ると、夏海は掃除をしている。

渡辺「お待ちのお客様どうぞー」

と、凛から商品を受け取り、会計。

渡辺「ありがとうございましたー」

凛、キャンディを持って店の外に出る。

渡辺「本田さんキリのいいとこで上がってね」

夏海「はい！　ここだけやっちゃいます」

○同・店の前（夜）

バイト終わりの夏海が店から出てくる。

傘を開こうとするが雨は降っていない。

凛の声「だから違うっつってんだろ！」

店の前で凛が警察官2人に囲まれている。

警察官1「いいから大人しくついて来い」

警察官2「その銀髪、オマエ入谷の西山だろ。ったく親の面汚しが。こんな時間に何してた？　女の子つけ回してたんだろ？」

凛「なんの話だよ！　離せよオラッ」

夏海「（駆け寄って）あの！　私のクラスメイトに何か用ですか？」

警察官1「クラスメイト！？　いや君のことだよね、コイツにストーカーされてる女の子って。匿名で通報があったんだ」

夏海「ストーカーなんてされてません！」

警察官2「庇わなくていいんだよ。コイツがやってるのは分かってるから」

夏海「違います！　彼は大事なクラスメイトです！」

警察官1「クラスメイトって……（失笑）君、コイツがどこの学校か知らないだろ」

夏海「知ってます。私も同じ入谷高校の生徒です」

顔を見合わせて爆笑する警察官たち。

警察官2「嘘は良くないよ」

夏海「嘘じゃありません！　学生証も……」

と、鞄を探すが学生証はない。

夏海「学生証はまだもらえてないですけど……

…」

警察官1「（西山を見て）残念だったな」

と、凛を連れて行こうとする。

夏海、警察官の手を剥がして凛の手を握る。

夏海「西山くん。行きましょう！」

凛「いや、ちょっ……！」

夏海、凛の手を引いて走り出す。

警察官たち「こら！　待ちなさい！」

と、追いかける。

○大通り・歩道（夜）

手を繋いで走る夏海と凛。

凛、繋がれた手を見つめながら走る。

○商店街・通り（夜）

警察官1「どこ行った！？」

警察官1と2、商店街のゆるキャラが2体描かれた顔出しパネルの前を通り過ぎる。

目の穴から夏海と凛の目が覗いている。

夏海「セーフでしたね」

と、パネルから出る。

凛「……何で庇った？　俺、ホントにお前のことストーカーしてたかもしんねぇぞ」

夏海「（あっさり）そうなんですか？」

凛「そうなんですかって……普通イヤだろ。犯罪だぞ。怖いんじゃねーの？」

夏海「だって、西山くんは意味のないことはしないし、理由もなく人を傷つけたりする人じゃないと思います。もしそれが本当だとしても、きっと理由があるはずです」

凛の瞳が揺れる。

凛「……警察にも目つけられてるような人間なのに、なんでそう言えんだよ」

夏海「他の人が西山くんをどう思っていたとしても、私にとっての西山くんは、困っていた時に助けてくれた親切な人、です！」

と、ニッコリ笑う。

凛「……（呆れて）どうかしてんだろ」

夏海「（ドヤ顔で）それに私、分かってるん

です。なんで西山くんがよくうちのコンビニに来ていたか」

凛「は？」

夏海、いちごミルク味の棒つきキャンディを出す。

夏海「これ。買いたかったんですよね？」

凛「……は？」

と、キョトンとする。

夏海「（探偵のように）あの日、西山くん本当はこれを買おうとしてたのに、私が預かっちゃったから買えなかったんですよね。その後もうちのコンビニに来てくれたのに、今度はキャンディが売り切れになってて買えなかった。西山くんオススメのこの味、人気みたいで、どこの店舗も入荷したらすぐ売れちゃうんです。でも今日たまたま1つ残ってたので、とっておきました。この間のお礼とお詫びです。どうぞ！」

と、自信満々に差し出す。

凛、堪えきれずブフっと吹き出す。

凛「アハハハハハッ。なんだよそれ。くはは
はは っ」
今度は夏海がキョトンとする。
夏海「（慌てて）違うんですか！？」
凛「いや……おもしれェからもうそれでいい
わ」
と、口角を上げる。
凛、夏海からキャンディを受け取り、
凛「ありがたくもらってく」
と、帰っていく。
夏海、首を傾げて凛の後ろ姿を見る。
○マンション・本田家・リビング（夜）
夏海、テーブルの上に色付き画用紙や
ハサミ、のりを広げる。
夏海「あのキャンディじゃないなら、なんで
コンビニに来てたんだろう……立ち読みの
ため？　それならわざわざうちの店じゃな
くていいし……」
春樹「ねぇちゃんひとりごとコワいよ……」

夏海「ごめんごめん」

春樹「なんか作ってんの？」

夏海「学校で使う掃除の分担表作ってるの。春樹のクラスにもあるでしょ？　これを切ってここに貼ってね」

春樹「オレ切るのやりたい！」

夏海「じゃあお願いしよっかな」

と、画用紙を1枚渡そうとする。

しかし、冬馬がそれを取り上げる。

冬馬「誰に押し付けられたわけ？　クラスのやつ？　それとも教師？」

夏海「違うよ！　これは私が勝手に作ろうと思っただけ」

冬馬「夏海はただでさえバイトとか家事で疲れてんのに、これ以上色々抱えてどうすんだよ！」

夏海「でもね、私昔から工作とか好きだから、全然苦じゃないの」

春樹「ねぇちゃんがやりたいって言ってんだからいいじゃん。かえせよーー」

夏海「お願い冬馬様！」

と、ねだるように手を合わせる。

冬馬、大きくため息をついて、

冬馬「……俺も手伝う」

夏海「ありがとう！　冬馬はこの文字切ってくれる？」

と、別の画用紙を渡す。

春樹「ほんとは冬馬もいっしょにやりたかったんだぁー」

と、からかう。

冬馬「……春樹は口じゃなくて手動かせ」

夏海、2人のやりとりを見て微笑む。

春樹「そういえばねぇちゃん、さっきなんでブツブツ言ってたの？」

夏海「あー！　この前ね、タバコを買いに来たお客さんがなかなか身分証出してくれないから、言い合いになったんだけど、」

冬馬「（厳しい目つきで）え？」

夏海「（慌てて）でもたまたまクラスの子がいて、その人を追い出してくれたから何も

なかったんだけどね！」

と、付け加える。

春樹「スゲェー」

夏海「そのクラスの子、それからよくうちのコンビニに来るようになったんだけど、なんでだろうなーって。別に家が近いわけでもないのに」

冬馬「欲しいもんがあって色んなコンビニ回ってたとか？」

夏海「私もそうだと思ったんだけど、違うみたい」

春樹「ねぇちゃんも冬馬も分かってねーなー」

夏海「春樹は分かるの？」

春樹「あったり前じゃん」

冬馬「なんだよ」

春樹「（自信満々に）かんたんだし。ねぇちゃんをヘンなきゃくからまもるためだよ！」

冬馬「お前なぁ」

冬馬は呆れるが、夏海はすんなり納得。

夏海「なるほど～！」

冬馬「いやいやいや。納得すんなよ！　だって夏海のクラスメイトってことは、そいつヤンキーだろ？　ヤンキーは人助けなんかしないから」

春樹「そんなことないし！　この前のドラマでヤンキーが女子まもってた」

冬馬「それはフィクション！」

言い合う冬馬と春樹をよそに、凛のことを思い出して頬が緩む夏海。

夏海「そっか……そういうことか……！」

春樹「ねぇちゃんなにわらってんのー」

夏海「（嬉しそうに）ううん。なんでもない」

○入谷高校・2年A組（授業中）

前の方では夏海に向けて授業がされているが、教室内は騒がしい。

凛、いちごミルク味の棒付きキャンディを舐めながら、ジグソーパズルの最後のピースをはめる。

凛「よし」

水着姿のグラビアアイドルの写真が完成する。

その時、チャイムが鳴り、教師が教室を出て行く。

夏海、教壇に立ち、

夏海「あの！　みなさんに聞いて欲しいことがあるんです」

小林「どうした転校生〜」

夏海「掃除の分担表を作ってきました。1日10分で構いません。どうかみなさんの力を貸してください！　お願いします」

と、頭を下げる。

小林「イヤデース」

佐藤「やりたきゃ1人でやれよ」

非協力的なクラスの様子を眺めながら、

龍太郎「あちゃー」

聖也「ちょっとかわいそーんなってきた」

と、席を立とうとすると、凛が突然立ち上がり、夏海の方へ行く。

分担表はクラスメイトが数人ずつグル

ープになり、円を回すと掃除場所が変わるようになっている。

凛、分担表を見て拓海たちの方に戻る。

凛「トイレ行くぞ」

龍太郎「連れションン？」

聖也「ウンコなら行かねーよ？」

凛「掃除だよ掃除」

クラス全員、目が点になる。

聖也「え？」

龍太郎「掃除？」

拓海は全てを察して口角を上げる。

凛「ほら、テメェらも！　自分の場所確認してさっさと動け！」

と、クラス全員に向けて言う。

しかし呆気に取られて誰一人動かない。

凛「おい、聞こえてんだろ。全員で掃除！」

と、クラスメイトに言い残して教室を出る。

最後の言葉で、生徒たちが渋々分担表を確認し始める。

○同・廊下

夏海、廊下に出る。

歩く凛の背中に向かって、

夏海「西山くん！」

凛が振り返る。

夏海「ありがとうございました！　掃除のこともも、それからコンビニの帰り道も！　またいつでも買いに来てくださいね！」

凛「これでこの間の仮は返したからな、夏海！」

と、歩いて行く。

拓海、聖也、龍太郎が教室の扉から顔を覗かせて、

龍太郎「凛が優等生のこと名前で呼んだ……」

聖也「自分が認めたヤツ以外キョーミねーのに……」

拓海「（嬉しそうに）つまり、そういうことだな」

夏海、満面の笑顔で凛の背中を見つめる。

（了）